



写真撮影 小泉義彦

忘年会、和やかなうちに終る

昨年12月11日(火)、恒例の緑爽会忘年会が開催された。闘病久しかった國見利夫元代表が出席されて「山脈 人脈」歩いて来た道」というご自身の登山人生を話された(本紙に掲載)。講演終了後、事務局手配の料理で和やかな歓談が続いた。欠席の吉田理二会員からは越後の銘酒が、市川義輝会員からは被災地石巻名産の笹かまぼこが差し入れされ、出席者の手土産もあって会費千円とは思えない豪華版だった。お顔の見えなかった方々のご健勝を祈りつつ散会した。(参加者26名)



ヒマラヤ 連峰

okuno



緑爽会報 NO.114

12月'13年1月合併号

発行

公益社団法人

日本山岳会 緑爽会

☎ 03-3261-4433

事務局 松本恒廣

夏原寿一 近藤雅幸

近藤 緑 川口章子

横山 隆 渡部温子

「11月山行報告」

湯河原〜幕山公園〜幕山(625m)

文・写真 横山 隆

係にとっては実に憂鬱な実施日の天気予報だった。前日の10日迄は快晴日のオンパレード、なのに11日は一転して午前中は曇り、午後からは雨模様の子報なのである。

参加者の一人Kさんに電話して一日早く行けないかと都合を聞いたところ、駄目との返事に覚悟を決めて予定どおりの実施とする。

今回の参加者は、留守電に入った順で書く、と川口章子、夏原寿一、渡部温子、梨羽時春、鈴木快信(敬称略)の5名である。

集合場所の湯河原駅東口3番バス乗場の前は広場になっていて、広場の中央には今日登る城山の城主土肥次郎実平と妻の像がある。

この湯河原は1180年代(治承4年)には土肥郷と呼ばれ、この地を治めていた豪族土肥次郎実平は桓武天皇を祖先とし、平将門の叔父平良文の血筋をひくと言われている。左手に長い弓を持って立つ実平と、左下には座って夫を見上げる妻の2人像である。驚いたことに今日同行の梨羽さんはこの土肥実平の末裔との話をその時に本人から聞かされる。

10時に駅を出発した幕山公園行きのバスは、13分後終点の幕山公園に着く。少し歩いた公園で山支度をし、小粒で酸味の少し強いみかんを求めて歩き出す。

車止めを通りしばらくは車道歩きが続くが、橋を渡った先が城山と大石ヶ平の分岐になる。いつ雨が降り出すかわからない空模様は、皆さんの同意を得て山を幕山に変更したので休まず大平ヶ平に向かう。

ここからは山道になり、緩やかで静かな道

緑爽会2月例会

版画家・奥野溪石会員の講演

「知られざる美術界の裏話」

とき 2月15日(金)13:30~

ところ JAC会議室

著名作品の評価、鑑定方法、TVで評判の「何でも鑑定団」の舞台裏、驚くべき贋作の世界、超名画の真贋論争、名画にまつわるエピソード、日本美術の世界に於ける評価、画家の裏技、本当の山岳画家は誰か? 係 松本

五郎神社からはバス利用で出発点の湯河原駅に戻り、全員駅前の2階食堂で生ビールで乾杯をし、皆さんの日本山岳会の入会きっかけなどを話して締めくくりにする。

足下には真鶴半島、その先には相模湾に浮かぶ初島が良く見える。幸いにも昼食は雨の降る前に終え、南郷山に向けて歩きます。13時30分、林道を南郷山の登山口に向けて歩く頃から小雨が降りだし、その為南郷山はカットして全員傘を挿し五郎神社に下る道に急ぐ。



幕山山頂にて 後列左から夏原・鈴木・梨羽 前列 渡部・川口

山脈・人脈―歩いてきたみち

國見 利夫

かつてこの緑爽会報に「山脈・人脈」と題して山と先輩岳人について連載した。不覚にも体調不良で連載は6回で中断してしまった。今回の機会に、続編という訳ではないが、そういう流れで山と人と併せて、私の山を回想してみたい。

何故、山だけでなく人が大事なのか。

他のスポーツ。特に競技スポーツで考える。例えば野球。出場選手は9人だが、巨人軍の例でいえば選手は90人もいる。投手も捕手も10人以上いる。試合の時は9人のメンバーに選ばれるために、同じポジションに属する他の仲間がライバルでしかない。

ところが登山は違う。一緒に登る友人はライバルではなく、ザイル仲間だ。ザイルを結び合った時、命は相手に託す。仲間が私と同じ技術を持っていることを信じているし、相手が私より能力が優れていれば一層いい。

そんなことで、山と人について併せて話を進めます。山脈・人脈と題する所以です。

◆少年期の山

大山・丹沢国定公園の大山に、父親に連れられて登ったのが初めての登山。1941(昭和16)年、16歳だった。旧学制で中学4年。今の高校1年生に当たる。学生帽、詰め襟の学生服に足には歯というて天狗様が履いていた台座が厚く、歯が太くて高く、鼻緒が白くて太い下駄で蕃カラストイル。山歩きが気に入ってその後も数回大山に単独で登った。

た。ルートは男坂と女坂があった。聞いてみると家内もその頃、大山に登ったというから、神奈川県のは阿夫利神社のある宗教登山の山として、多くの人が登っていたようである。先日、墓参で小田原に車で出かけた。厚木・小田原自動車道に入ると先ず目に入るのがこの大山。どつしりと裾野を広げて座る大山は本当に大きく見事な山だ。だから私は年に数回、初めての山、大山に接している。

続いて丹沢だ。この頃から同じ中学同窓に2人の友人が現われ一緒に登ることになった。また、この中学には英語教師に石渡清先生がいて、一緒に登ることはなかったが、山に詳しく、色々助言をもらって登った。あとで知ったことだが、この石渡先生は、戦後1949(昭和24)年、山岳会に入会されている(会員番号4155)が、1950年から60年頃に雑誌「山と溪谷」に山岳の古典文献の解説や蒐集の苦心談を長く連載して、私も毎号これを楽しみにして読み、その影響で、以来山の書物の蒐集にも手を染めることになる。私には二重の意味で山の先輩だ。今日はその一編「鳥水著作の蒐集」の直筆原稿を持ってきましたので、後でご覧ください。この直筆原稿は山学同志会の斎藤一男さんのお宅にお邪魔した際に、同氏が蔵書と共に所蔵されていた原稿で、この石渡さんは私の中学時代の恩師だと伝えと、同氏は気軽に「君にあげる」と頂戴したものだ。斎藤一男さんについては、また後で紹介することになると思うが、同氏も山岳書の高名な蒐集家で、私と同年代から戦中派。戦争と水害で山の文献蒐集の殆どを失ってしまったが、その後も蒐集を続け、遂に自宅に置ききれず、奥多摩に山荘を建て書庫にしたという蒐集家だ。



★講演する国見さん 撮影 小泉義彦

―国見利夫さんの略歴―

1925年小田原市で出生。明治大学法学部卒。衆議院事務局で司法・地方行政等の立法事務を担当。衆議院参事。後に議会運営の功により勲4等旭日小綬章を受章。日本山岳会評議員、自然保護委員長、東京都山岳連盟常務理事、日本山岳協会事務局長、日本ネパール協会理事、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト事務局長、日本高山植物保護協会理事、日本山岳文化学会事務局等を務める。現在、東京都山岳連盟及び日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト顧問。

誌家としてこの斎藤さんと石渡先生の2人を挙げています。

山の話に戻ります。大山から丹沢に目を向けるようになったのは、この石渡先生の助言からですが、丹沢の大倉尾根や表尾根までは、大山と同じように相変わらず、履物は高下駄で登った。友人2人と共にやがて沢登りを目指すようになるとさすがに高下駄では駄目、女性の駒下駄の使い古しで、歯の殆どすりへった赤い鼻緒の下駄に替った。沢登りではどうせ沢の出合でワラジに履きかえて、それまでの履物はザックに納める訳だから、登山靴や大きな高下駄ではザックがふくらみザイルさばきの邪魔になる。街をワラジがけで歩くわけにはいかないからこのスタイルがはやった。すりへった歯の赤い鼻緒の女物の下駄を

◆戦時下の登山

1943(昭和18)年中学は卒業したが、大学受験に失敗し1年間の浪人生活。この年はもう大威張りして山に登れる環境ではなかった。2年前に始まった大戦は既に敗色が濃く、各海戦はすべて敗北、次々に若者が戦死。10月には出陣学徒壮行会が明治神宮外苑ではなやかに行われたが、これは従来大学・高等専門学校生徒は徴兵年齢の20歳になっても、卒業まで徴兵を猶予されていたが、この日をもって理科系を除き文科系の学生はすべて徴兵されたのだ。12万人の学生が動員され、すべて最激戦地に配属され、殆どが帰ってこなかった。

この浪人中一度だけ、我慢できずに丹沢に出かけた。この時は下駄でなく編上靴に木銃をかついで出かけた。木銃は部落のはずれにかくしておいて大倉尾根から鍋割峠まで往復、戦後も長く続いたが、これは神奈川県だけで

かくして置いた木銃を拾って帰った。何故木銃なのか。

戦時中、敗戦まで登山は禁じられていなかったが、登山者の方が遠慮して東京近県の岳人は行軍登山と称して、各県から木銃を肩にして山をつたい歩き明治神宮を目指し、戦勝祈願をすることがはやった。なかには九州からはるばるやって来るパーティもあった。この神宮行軍は、この年から始まったのだが、明治神宮参拝のほか、併せて日光白根などにも登っている。翌20年には高等専門学校行軍山岳訓練大会が開かれ、7校が1泊2日、立山で早さを競っている。

いずれも戦時、登山の生き残りを考えて登山関係者が考え出した山行だが、この現象を私の尊敬する岳人、織内信彦さんは「行軍登山は登山に非ず」と警鐘をならしている。織内さんは、時代に流されない権力に屈しない

明治人の気骨をもった立派な人だった。織内さんについては日本山岳文化学会の2003年第1号の機関誌に想い出を書いたことがある。

1944（昭和19）年明大に入学した。

大先輩の斎藤さん（名前失念）が明大山岳部OBで、そんなに山が好きなら山岳部に入れ、俺が手続きをしておく、ということでは山岳部に入ったつもりでいたが、何の連絡もないうちに8月には学徒通年動員が発令され、中学・高等女学校生徒以上が、兵役に召集された若い者に代る補充労働に動員の指令が出て、私も数ヶ月の大学生活だけで、工場勤務、引続き軍隊にとられてしまった。大学山岳部は閉部の措置があった訳ではなかったようだが、もう機能でなくなったのだろう。なにかの自己紹介に山岳部入部と書いたような気がする。これは錯誤とはいえ経歴詐称で気になるところだ。

◆軍隊時代のエピソード

後年村井米子さん（NO3001）から聞いた話。戦中のこと。娘さんが戦時の食料不足で結核に冒され病床にあった。その娘さんが、米軍機がしきりに秩父山脈や赤城山上を飛ぶのに気付いた。「お母さま、きょうの飛行機は霧ヶ峰や菅平よ」「あら清水峠の上だつて」「今日は八ヶ岳だの上高地と山の上ばかり飛んでいる」。もう病いで山に登れなくなった娘さんが、しきりにラジオの防空情報を聞いていて気づいた。

ある日、応召した山仲間から村井さんに電話がきた。どこにいますのかと聞くと、東部軍司令部で情報係だという。「それじゃ、あなたがラジオ放送原稿を作っ

ているのでしょうか。米軍機が八ヶ岳の上高地の山ばかり飛んでいる」「アッハッハ、気がつきましたか。少数の敵機に自由に飛ばれるといやになる。峠めぐりは勿論、スキー場めぐりもやっています」と高らかに笑った。

この人が中屋健次さん（NO1247）で名誉会員、旧制高校・東大ともに山岳部。山岳会では副会長も勤められた。東大名譽教授だった。

なんでこんなことを話したかというと、昭和20年春頃から私も東部軍の作戦室にいた。所属は中屋さんとは違うが、皇居前、北の丸の竹橋の東部軍の地下坑で同室だ。このルーム（注・JAC会議室）の10倍はある広さで部屋一杯の日本地図は山も川も立体で再現され、敵機の位置はライトで表示される。後日、戦後の中屋さんの話では、

一軍は国民に敵機の行動を逐一知らせることを作戦上喜ばないところがあつて「敵は八ヶ岳東方を北進しつつあり」というような表現になるのだが、軍幹部は八ヶ岳を知らない。場所を教えたら「ならば甲府北方八ヶ岳にしろ」という。甲府は山梨県で八ヶ岳は長野県だからまずいという、やつと八ヶ岳でOKが出た。中屋さんは日本陸軍の閣下の無能にあきれていた。

一方私の任務は、同じ地図を見ながら、東京防衛に当る東部軍第1戦隊、第2戦隊との交信だから「敵1機小田原上空東進中」とか「敵2機平塚上空、第1戦隊出陣せよ」と正確に伝える必要があつたから、好きな山に米軍機を飛ばせることはできなかったし、仮に中屋さんと任務が逆であつたにしても、道楽の山を戦闘中にシヤレで楽しむ余裕は私にはなかっただろう。中屋さんは陸軍中尉、私はまだ幹部候補生で半人前の軍人だったから。

村井米子さん、中屋さん、私とそのうち一緒に村井さんの娘さんの思い出を含めて3人で一緒に話をしましょうと、折を見ているうちに村井さんは1986（昭和61）年、続いて中屋さんはその翌年3月、相次いで亡くなられてしまった。

1945（昭和20）年8月15日、日本が敗れて戦争が終わった。待ち望んでいた平和がやってきたが、敗戦の翌日から食糧は姿を消し、インフレで物価は毎日のように上がったから紙幣は紙クズ。物価は戦中の90倍になり国民生活はこわれてしまった。

そんなある日、久しぶりにサブザックを背に、愛用の高下駄で家を出た。しかし目指す所は神奈川県中部にある国府津、ここに叔父夫婦がいて二人とも教師だが兼業農家。背にしたサブザックは山道具は入っておらずカラ、帰りに野菜や米のヤミ買い食料で一杯になる。しかし田畑の中に立つと遠くにそびえる大山が眺められた。

“国敗れて山河あり”で大山はその姿を変えていなかった。山への回帰の瞬間だった。当時まだ乗車制限があり遠距離の乗車券は手に入らなかったから、やはり丹沢・奥多摩の範囲から出られなかった。相変らず高下駄と赤い鼻緒の駒下駄スタイルだった。

◆登山活動を再開

1950年代に入って旧山小屋倶楽部に入会して我流登山から抜け出す。この会は代表中村謙さんで1935年に日本山岳会に入っているからNO1610の古い会員で、その山行数も1123回。ガイドブックも多数出していた。このクラブで南北中のアルプスを体験することになる。



国見さん（左側中央）を囲んで

この倶楽部で一人の友人が出来て、この人が谷川岳を目指していることを知り、会山行とは別に、しばしば谷川岳を訪れた。初めは南面のヒツゴ沢、オジカ沢、鷹の巣沢、その他で、南面の沢は丹沢の延長線上のたのしい遡行だった。

いよいよ一の倉正面に対峙した。勿論その前にマチガ沢にも入った。一の倉は眺めているだけだと勇壮な姿だが、いざ登る目で見ると正に地獄の門に見えた。多くのクライマーがここで墜死している。初めてのルートは二ルンゼ上部のBルンゼ。エボシのスラブは逆層だから岩につかみどころがない。手のヒラを岩にたたきつけて摩擦面を作って攀じると足は地下足袋にワラジをつける。雪解け時は特に落石が多い。小銃弾のようなスピードで目の前のスラブに叩きつけられて火花が光る。当時はヘルメットなどないから頭にはハンチングだけ。落石に当たったら一巻の終りだ。Bルンゼに入ると落石はなくなったが、ここからは垂直な岩壁登りだ。トツは私、ラストが友人の浅利君。そしてミッテルには新人の若者、ラストの浅利君が助言を与える。

「右足、もう少し上にあげる。スタンスがある。右足だ。箸を持つ方の足だ。今度は左足のスタンス。左足だぞ。お茶碗を持つ方の足だ。」

みんな極度に緊張しているから右足で箸を持ち、左足で茶碗を持つという助言のあやまりに気がつかない。谷川岳ではA・B・C・Dの各ルンゼ、α(アルファ)ルンゼ・β(ベータ)ルンゼに登っている。後年直立岩正面壁、コップ状岩壁が登られるようになるが、私の頃はまだヘルメットも埋込ボルトもなく、ザイルは12mmの太い麻ザイルで直立岩など思いも及ばなかった。ここに当時使ったハー

ケンとカラビナを持って来ました。重さが違う。こんな重いものを10本、20本持つての登攀だから条件も悪い。

後年のことになるが、岳友のどんぐり山の会の出口隆好君が一の倉沢直立正面壁で墜落、宙吊りになっていると新聞朝刊に大きく報じられた。昭和35年9月のこと。この日、出口君は正に登攀を終え、早朝一番で帰宅、背広に着替えて仕事場に着くと、所長が出口君の顔を見るなり、「出口君、君が谷川岳で宙吊りになっていると新聞に出ていた。早く行って助けてこい」という。出口君はたしかに昨日正面壁を登ってきた。それがなぜ遭難なのかと思つたが、所長がせきたてたので、仕事をやめ家に帰ると、まだ手もつけていなかったザックを肩に家を出た。とにかく土合山の家の中島喜代志さんに会えば解るだろうと。中島さんの届けでは当日この岩にとりついたパーティーは「どんぐり山の会」と「かたつむり山岳会」で、遭難発見者にこの2パーティーの名を示し聞いたところ「どんぐり山の会」だと答えたので、ならば遭難者はどんぐりの出口ということで記者発表したのだという。発見者が東京の人で「どんぐり」の印象はあったが、神奈川の「かたつむり」の印象がうすかったのだろう。

谷川岳の遭難といえば、直ぐ緑山岳会を連想する。遭難救助に欠かせない山岳会だ。寺田甲子男引きいるこの会の救助隊が遺体を担架に乗せて旧道を下るのをよく見かけた。一の倉の墜落事故では警察や自衛隊では手に負えず、緑に頼るしかなかったのだ。救助が終るとメンバーは水上の料亭に入り芸者をあげて盛大な「おきよめ」をする。蛮勇の集団と見られ、その是非にいろいろ意見もあったが、緑山岳会代表の寺田甲子男は「ロクオロシの

甲子さん」の虚名が先行しているが、根は親切な友情に厚い男だった。私は彼の主宰する「高度登山家集団」OYG(おやじ会)でお世話になった。私より1歳年上大正13年生れ、一昨平成22年に亡くなられた。87歳。

緑の幹部の一人、半沢稔氏とは東京都山岳連盟の行事の山行に役員として一緒に参加したが、彼も訥弁だったが、善良な青年だった。鬼の伊助と恐れられていた坂口伊助氏も若い青年だった。谷川岳の脳のはみ出てしまった墜落死体を無造作に背負い降りたり、喧嘩上手で、身近にあるバケツや洗面器をいきなり相手にかぶせ、一撃を加えると早々に姿を消す。小柄だから決して四つに組まない。自分を知つての喧嘩上手。鬼の伊助の異名もこんな所から来たのだろう。

或る日、衆議院事務局の私の所に参議院事務局の青年が訪ねて来た。伊助さんら緑山岳会のメンバーを中心に、一般市民対象に登山教室を開いていて、その講習生だった。今日はその終了式で、坂口先生が終了証書を渡す際「衆議院に国見という男がいる。俺の山仲間だ。挨拶をしておけ」といわれて来たという。坂口先生の山仲間なら立派な登山家だ。身近に立派な登山家がいる嬉しい、といつて大きな土産を持って現われた。この頃「鬼の伊助」は「仏の伊助」になっていたらしい。伊助さんのおかげで私まで立派な登山家になってしまった。

1988(昭和63)年ソウル山岳連盟の招きで雪嶽山に登った。20名近い集団登山だったが、伊助さんと私は最後の、さらに離れた後尾を二人で語りながら歩いた。当時もう体調が弱っていたのか、途中から下山してしまつた。

その4年後の92(平成4)年彼は本当のホトケになってしまった。まだ60歳だった。

◆再び谷川岳のこと

1958(昭和33)年5月、友人と二人で残雪期の谷川連峰縦走を試み、三国峠から平標小屋に1泊。ところが翌日は降雪しきりで、やがて吹雪になった。ラッセルもきつくなった。谷川岳に登っても登頂の喜びもあるまいと、万太郎山から吾策新道、万太郎谷を降ることにした。持参した地図は「四万」だけでエスケープルートの「越後湯沢」は持っていなかった。ガイドブックのかすかな記憶をたよりに下つたが、ここで相棒が滑落、立木に激突して膝を強打してしまう。私達は万太郎稜線で捜査活動中の高波吾策さんに会っていて、今土樽小屋に行く所だと話すと、なからは家内に伝えてくれ、遺体発見したので夕方までにおろす。遺体焼却の焼料伐採の許可



ヒゲの吾策さんと(昭和33年)

を営林局に連絡を」と託されていたので、ゆつくり下つていられない。相棒はあとで下らせることにして独り小屋をめざす。幸い相棒は大分遅れたが独りで下ってきた。この日は遭難者の遺族もおとずれてきて通夜告別式が行われた。邪魔を恐れて早々に小屋をあとにした。暫く下つたところで、吾輩さんの打つ土樽の鐘が鳴った。私達への「さよなら」の挨拶なのか。通夜の開始を告げる鐘なのか。私達は無言で山の家の方向に向つて頭を下げた。

このコースは昨年と同じ残雪期、単独の女性が行った場所、幸い彼女は生存して救出されたが、後日、私は山溪か朋文堂が忘れたがガイドブックの誤りに厳しく抗議した。あとで丁重なあまり状が届いた。

この縦走コースをそのあと1962(昭和37)年の同時期、別の仲間と歩いたがこの時は雪は全くなく、アイゼン・ピッケル・ワカンの完全装備は全く無駄な持物で終わった。この順序が逆だったら大変なことになる筈だ。谷川岳はやはり魔の山だ。

梅雨どき、雨しきりの中をいつもの相棒と倉沢出合にテントを張った。始めから登るつもりはなくテントの中で寝ているつもりだったから登攀用具は全く用意せず、仕入れた古本・民謡集。それに炊事用具だ。本を読みあきるとドラ声で民謡をうたう。そこへ上合山の家の喜代志さんが現われてテントをのぞき込む。雨中の岩登りを監視するパトローらしい。一の倉沢に寝に来たといつてもなかなか信じられないらしく、難談的に濡れた岩場の危険をさりげなく話して帰っていった。この頃の私達は、登れなくても一の倉沢出合に居るだけで心が安らいだ。一の倉の直立8

00mの岩壁は絶高以上で、きり立つ壁を見上げてみると首が痛くなる。寝て見るに限るが、登る時は寝て見る訳にはいかない。こういう時こそシュラフに入つて終日、岩壁を仰ぎみる事ができるのだ。

後年1976(昭和51)年谷川岳にゆかりの数名の先輩岳人をさそつて、喜代志さんの土合山の家で終日谷川岳談義に華を咲かせ、翌日旧道出合めぐりをやろうと提案した。人は杉本光作さん、徒歩渓流会の創立者で谷川岳に300回以上登った人。山口清秀さんはJACNO1151の会員、徒歩渓流会の創業者、ひたすら谷川岳に登り、一の倉の黎明期を作った人で山行は400回近く、一の倉奥壁、二の沢左保等単独でひたすら谷川岳に登る。山ばかり登つていてビルの一つも建てられなかったといつていたが、1977(昭和52)年に訪ねたら渋谷駅前に立派なビルを建設中だった。著書『踏跡』は死後完成した。単独行が多かった。この日も私たちがマチガ沢からの倉沢へ向つたが、山口さんは独りマチガ沢本谷を廻行していった。70歳だった。

その他の参加者は山岳巡礼倶楽部の高橋定昌さん(注・高橋さんについては私が日本ネパール協会「会報」(1988年12月号)に思い出と弔辞を書いている)。他に竹内辰儀さん(通称山岳会)で、いずれも大正1ヶ月生れの昭和初期の谷川岳に情熱をかたむけた人達だった。谷川岳登攀のよき先輩だった。

◆職場に山岳会誕生

1961(昭和36)年に若者が職場に山岳会を作った。衆議院山岳会。当然のように入会の申込みに出掛けた。ところが発起人のその友人は「大丈夫ですか、そのお年で」と

きた。私のその時の年齢は36歳。当時はまだ中高年登山ブームの前だった、36歳はまだ老人とは思っていなかった。「入れる」「入れない、そのお年では」の問答が、当時の職員組合の機関紙の「雑報欄」に面白おかしく創作され、以後、会う人毎に「大丈夫ですか、そのお年で」とやられてしまった。勿論入会を果し、委員の一員となったが、翌年の本格年度から会長制をとることになり、文句なく私が会長職についた。以降1982(昭和57)年まで20年間会長職にあった。役員には大学のワンゲルでリーダーだったもの、地域で小さな山岳会を持っていた者、川崎山岳会など「しにせ」の山岳会会員などの経験者がいたから運営はスムーズに出来た。職場山岳会のいい所は、コミュニケーションがとりやすく、リーダー会、委員会を職場の休憩時に所内の喫茶室で済ませたり、会員集会は所内の集会室が使えて集まりやすいこと。反対に困ることは春山合宿、夏山合宿などの際は、

きた。私のその時の年齢は36歳。当時はまだ中高年登山ブームの前だった、36歳はまだ老人とは思っていなかった。「入れる」「入れない、そのお年では」の問答が、当時の職員組合の機関紙の「雑報欄」に面白おかしく創作され、以後、会う人毎に「大丈夫ですか、そのお年で」とやられてしまった。勿論入会を果し、委員の一員となったが、翌年の本格年度から会長制をとることになり、文句なく私が会長職についた。以降1982(昭和57)年まで20年間会長職にあった。役員には大学のワンゲルでリーダーだったもの、地域で小さな山岳会を持っていた者、川崎山岳会など「しにせ」の山岳会会員などの経験者がいたから運営はスムーズに出来た。職場山岳会のいい所は、コミュニケーションがとりやすく、リーダー会、委員会を職場の休憩時に所内の喫茶室で済ませたり、会員集会は所内の集会室が使えて集まりやすいこと。反対に困ることは春山合宿、夏山合宿などの際は、



厳冬の北岳山頂にて(昭和44年)

右隣や左隣の相棒も休暇届を書くという状況で、気の弱い者は合宿に参加できないことになる。当時は5月の祭日は3日と5日位で、その間に日曜日が入って3日間。昭和の日4月29日、みどりの日5月4日などなかったし、土曜日も休日ではなかった。

春山合宿は、世間並に北ア、谷川岳が多かったが、昭和46年の越後駒ヶ岳、昭和48年の飯豊連峰がよかった。なにより残雪がどこよりも豊富で、他のパーティーの数が少なく、存分に雪上訓練が出来た。職場で認定されたサークルは年に1〜2回、前職員を対象とした行事を行うことが望まれており、そのために実施した行事には補助金が出た。夏に公開山行として北ア縦走、尾瀬などで実施した。南アは参加者が少なかった。尾瀬は木道がまだ単線だったから燧岳からのパーティーと鳩待からのパーティーが対面すると負けた方は、木道を下りて湿原に立つことになる。湿原は今乾燥しているが、当時は水量豊富で山靴がスッポリ沈んでしまう。30人のパーティーを湿原に立たせないため、トップのジャンケン担当者の責任は重い。鳩待から燧へ一ひたすら木道を踏みはずさないように、或いは水草を眺めながら歩いていると、左手の大きな山を見過してしまふ。この山は景鶴山。私達はこれに登った。貴重な自然の宝庫だった。この山は私達が登った翌年から自然保護のため登山禁止になった。だから誰も以降登ってはいない筈。貴重な体験だった。

ある年の春合宿、谷川岳マチガ沢出合でテントを張った。そこへ他のパーティーが現われ、我々のテントを見て「お坊さんの山岳会が来ているぞ」と叫んで通った。当局が作つてくれたこのテントには大きく衆議院を書いてある。霊寿院などお寺の院から連想したので

う。衆議院と山岳会とはなじまないのだろうか。

1976(昭和51)年7月4日、衆議院事務総長の藤野重信さんが前穂高重太郎新道を下山中転倒、滑落遭難死され、これが新聞に大きく報道された。併せてザツクの中から拾い集めたゴミが出てきたことも美談として強調されていた。このルートの右隣一帯は衆議院用地で、今はビル街だが当時は衆議院宿舍数戸があつて、藤野さんも私もここに住んでいた。一度訪問したことがあつたが、その時も山に出掛け留守。私より多く登っているようだった。

この遭難死と、この遺体収容作業を山岳会行つたことを知って現われたのが、遥か昔、帝国議会の書記官長(今の事務総長)の大本操さんだ。大本さんは初期の山岳会員(NO315)で神代の人と言われた人。旧制一高の創設者だ。大本さんについては、緑爽会の「山脈人脈」のNO1で取上げたので重複をさけます。吉祥寺の大本さん宅へ、会員数名と一升壇をぶら下げて度々邪魔した。酒好き、豪放で談話、山の話は尽きなかった。ウェストンに叱られた話の仕掛け人は私だ。

こんな次第で衆議院事務局にも登山愛好者はいた。さらに議員では橋本龍伍(文部大臣、厚生大臣)氏は会員だったし、子息の橋本龍太郎(内閣総理大臣)氏も会員でヒマラヤ遠征隊の隊長として出掛けている。今の自民党の大幹部谷垣禎一氏は東大スキー山岳部所属、参議院議員の田英夫氏は学習院大のスキー山岳部員。所属はなかったが、山好きで後に環境庁長官として尾瀬の林道建設の工事中止を決断、尾瀬の自然を守つた大石武一氏もいる。このうち田英夫、大石武一さんとは後に尾瀬を守る懇話会の立ち上げで一緒に仕事をした。

大石さんについても会報に「山脈・人脈Ⅲ」で述べている。

◆東京都山岳連盟のこと

都岳連は1948(昭和23)年に発足、25年後の1973(昭和48)年には、やや金属疲労を起こして問題を抱えていた。一部の団体の独走、非民主的人事、それに理事長による選挙違反事件まであった。

(注 昭和41~42年、当時の会長平井義一氏は衆議院議員。その選挙に当り、当時の理事長石田君が加盟各団体に投票依頼をした選挙違反事件)

これに対し、安川茂雄、杉本光作氏らが刷新の会を立ち上げ、当時の執行部に改革を求めた。その提案が認められ新会長に東京白樺会の鎌田久氏が選任された。某々日、その鎌田氏から電話があり、「あなたに常務理事をお願いしたい」ということであつた。岳連活動皆無、岳連に知名度のない私が理事になるためには二つの機関の選挙に立候補し当選する必要があるのでは本気にしなかったが、その後の加盟団体による常任委員選挙で最高点で当選、続いてその新常任評議員による理事選挙でも最高点で当選してしまつた。あとで聞いたところ、刷新同盟が役員候補をあらかじめ決めていて、その100%が当選したのだという。

小さな山岳会でコツコツ登つていた一登山者が、急に大海に放り出されたような気持ちだ。当時の都岳連加盟団体は250団体。大所帯だった。担当は財政、総務、広報と色々受けたが、今迄と違う登山の体験だけを紹介します。

都民体育大会というのがあり、各区で競技を競うが、山岳は非得点競技で参加していた。

1977年の第30回大会では大会委員長を命ぜられた。八ヶ岳、小屋泊り自炊方式で計画書、装備、歩行、安全対策、生活技術などをチェックする。都区内からチームが出ていた。併せて、こちらからは道々観望望気、高山植物講習も行つた。私を補佐するリーダー諸君で、気象庁山岳部のリーダー氏、高体連登山部の教師などが講師をつとめてくれた。

また、国体都予選会が丹沢で行われた際は審判長を勉めるなど、今迄にない登山を経験した。

1978年は都岳連30周年記念で、都境一周の計画立案をし、実施した。南コースは多摩川河口から世田谷、八王子の街中を行き陣馬、鴨沢、七ツ石、雲取。北コースは江戸川河口から新荒川大橋、青梅、棒の嶺から雲取。この雲取で集中、企画で作成した地図は五万の地図が30枚だった。稜線歩きで「お前の右足は埼玉だ。左足の都側に併せろ」などと冗談がとんだ。

1989(平成元)年の40周年記念の主行事は海外登山だった。東マレーシアのマウントキナバル、韓国の雲嶺山、台湾の玉山の3隊。私はこの3隊全部に参加したが、玉山では団長をつとめた。記念行事は一部精鋭による高峰登頂でなく、みんなを対象とした海外登山の実施だった。

都岳連の仕事は監事を含めると30年在席した。だから私は現在も都岳連顧問の肩書きを頂いている。



上・女人禁制の山、大峰山で確保するガイドたち 下・宙吊りにされる岩壁

◆日本山岳協会の常務理事

1975(昭和50)年、日山協の松方三郎会長が現職のまま亡くなられて、副会長の渡辺公平副会長が代行を勤められていたが、この年、改めて正式の会長に選任された際、私に常務理事を命ぜられた。担当は自然保護だったが、その後、会長のお世話役が必要というところで、会長と同じJAC会員ということで私が会長付き、肩書きに総務が加えられた。会長と共に1976年の31回佐賀国体で青振山系、32回の青森国体で八甲田、33回の長野国体で戸隠を登ることが出来た。全日本登山大会では17回の秋田駒、18回の奈良大峰山、19回の宮城蔵王を回った。

国体はJACが所管していて公平さんはその頃から国体競技を体験しているから、国体初めての私などが役に立ったのかどうか。一つだけ全日本登山大会18回大峰山の話。今に残る女人禁制の山、このコースはハードなので公平さんは留守番するから、君が会長役で登つてこいと言う。喜んで参加した。女人禁制は江戸時代、早くも緩和されていて、この時期「女人不許入」の表示を立て、女人の入山を拒んでいる山はここだけだ。その夜は山頂の宿坊を借り切り、各地の岳友が背負い

上げた銘酒に酔い男子万歳を叫んだ。翌日、ガイドに視岩に案内され、絶壁360間の深淵にザイルで結ばれ、逆吊りにされる。ザイルを握る先達に「親を大切にするか」「女房を大切にするか」「女性をだまさないか」と誓わされて、昨夜の男性万歳の酔いは一度に覚める。考えると女性禁制という縄を張って神々しさを装っているが、女人結界は男だけになって女の幸せを祈る男の照れ隠しではなかったか。11月の末だから下山した洞川は冷たい雨からやがて雪になった。雪のちらつく街道に公平さんが待っていて迎えてくれた。「君、おいしいコーヒーを飲ませる所をさがしておいた。すぐ行く」。私と公平さんはコーヒー仲間だった。

昭和54年の5月10日の理事会で、私の任期2期4年が終り、公平さんはなお1期会長職を続けることになった。次期執行体勢だけの会議だったので早く終り、みんなは早々に会場を後にして、公平さんと私だけになった。雑談の最後に「君、これからどうする」。私は「JACに帰って、自然保護委員会の仕事に専念します」と答えた。「それがいい。そうしてくれたまえ」。これが公平さんとの最後の会話だった。翌日はJACの昭和54年度総会。私学会館で会議を終え、懇親会が始まった。その時、公平さんが亡くなったとの報が伝わってさわめきが広がった。亡くなったのは11日の午前3時45分という。私と会話して別れた数時間後、私が最後の会話の相手だった。心不全だった。

◆再び日山協へ

これが第1回目の日山協だが、再び198

9(平成元)年常務理事に選任された。当初は自然保護担当だったが、翌年事務局長となった。この頃、私は職場を退職していた。協会はアマチュア登山の最高の登山団体だが、あくまでアマチュアだから、会長も副会長もアマチュア。ところが事務局長は専任で、有給・日給が出る。日給や手当を貰って好きな山に登れるのは有り難いが、忙しさも猛烈だった。国体は、

1989(平成元)年 北海道ニセコ・羊蹄山
1990(平成2)年 福岡 背振山系
1991(平成3)年 石川 白山山系
1992(平成4)年 山形 飯豊連峰
1993(平成5)年 徳島 祖母山系
1994(平成6)年 愛知 奥三河山系
全日本登山大会

1989年 広島 宮島弥山・三倉山
1990年 岐阜 穂高連峰

この2回は大会委員長を務めた。

1991年 山梨 甲斐駒・北岳
1992年 熊本 五家荘山城

忙しかったけれど、個人ではなかなか登れない山にも登れた。

中年登山がブームになり、その事故も多くなりました。そのため中年安全登山講習会を各ブロックで開催するよう要請。平成3年神奈川岳連で開催したのに出席したのははじめ、各ブロックを回り主管者として挨拶し、講評するのが役目でした。

スポーツライミング・ワールドカップ・ウィーン大会(1991)、スポーツライミング・アジアチャンピオンシップなどに参加しましたが、これは私の経験内容にない体験でした。UIAAのアジア山岳連盟の会議で、日本代表として韓国・仁川(1994)、カトマンズ(1995)に出席したのも初めての

体験でした。

事務局長をやっていると、公式でない会合にもお招きを受けます。仙台の伊達篤郎さんを中心に自然を守る伊達の会などに幾度もお招きを受け、仙台にまいりました。また、新野地温泉でいっぱい飲む会(1991)は近県岳連の幹部十数人が集まっていました。北野良一聖峰山岳会長を祝う会に招かれ甲府に出かけ挨拶を頼まれましたが、何を祝う会なのか全く分からず、挨拶の中味に苦労しました。

70過ぎたら一切の公的な仕事を止めるというのが東洋の教えと聞いています。これに従って1995(平成7)年3月日山協事務局長を辞任しました。

ところが、こんなカッコよく結末は来なかった。私の退任を待っていたようにHAT-J(日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト)の代表田部井淳子さんから書簡が来て、多忙でテントコ舞いをしている。ルクラの焼却炉の担当をして欲しいという。HAT-Jはネパールでエドモンド・ヒラリー卿から要請されて田部井さんが、日本にネパールの環境活動を目的とした団体を作ること約束した団体で、田部井さんには知名度があっても組織を持たないので日本の山岳4団体(日本山岳協会、日本山岳会、ヒマラヤ協会、勤労者山岳連盟)が田部井さんを支えることで発足したのだった。支援団体の一つの責任者だったので、私も理事の職を受けたが、日山協が多忙で、あまり執行には手を出せなかった。問題点を整理して訪ネ。焼却炉問題は解決したが、引続きリンゴ植樹も引受け、数回ネパール行きをしているうちに、事務局次長、事務局長になり、すっかり協会の人になって

しまった。14年間役職を離れていない。私は今、顧問になっている。

◆老いの暴走はなお続く

2002年に、斎藤一男さんの提案で山岳文化学会の設立を準備、発足させた。近藤信行さんも加わっています。山岳文化に関する研究・保護・保存と振興、普及を目的に発足し、私は事務局長に選任された。

私の研究のテーマは宗教登山。富士塚、富士講で23区内の東大久保富士、文京区の音羽富士、白山富士、浅草富士等20箇所位回ったが、都内の富士塚は100近く、前途はまだ長いのに病で中断してしまった。

長い登山生活の最後が宗教登山であることに、私は心のやすらぎと満足を感じている。鬼の伊助さんがホトケの伊助で人生を終えたことと思ひ合せ苦笑した。

2005(平成17)年、肺気腫で倒れてから7年になる。この間に日本オリンピック委員会委員長と日本体育協会会長の連名で、

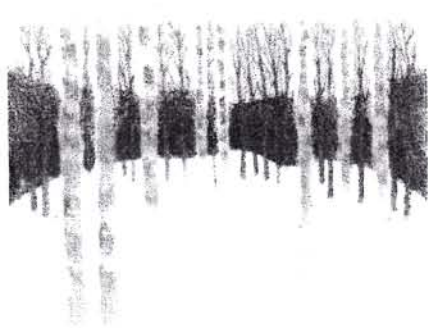


御在所岳藤内壁で最後のクライミング(昭和54年)

永年にわたりわが国のスポーツ振興に貢献したとして表彰状を、また、日本山岳協会会長から日本登山界の発展に尽力した功により表彰状、さらにH.A.T.I.J.の田部井淳子代表からはヒマラヤン・アドベンチャー・トラストの理念を深く理解し、積極的に活動に参加した功績により感謝状をいただいた。

実際の登山では、2000年に緑爽会の大山恭司さんと梅本知榮子さんが元老の織内信彦さんと準元老として私の二人を車で、立山室堂、剣の馬場島に案内してくれたことが忘れられない。そのあとも若干のハイキングをしてはいるが、剣・立山の基地まわりは私の登山のフィナーレとして思い出深いツアーだった。額に汗して歩いた室堂は観光化されていたが、北鎌の岩場の基地は観光化がなくて静かだった。佐伯郁夫兄弟や文蔵の息子との話らいも楽しかった。昔、若い頃、年とって登れなくなったら若い者にカゴを担がせても山に登るぞと言ったが、その現代版でカゴでなく車で若い二人に、なつかしい山々に案内してもらったことを感謝しています。

(2012年12月11日)



版画 奥野溪石

登らない山の楽しみ 近藤 緑

昨年末、越後の吉田理一会員から、「越後山岳」第12号が送られてきた。今西錦司・西堀榮三郎と共に京大三羽鳥と言われながら、戦後まもなく亡くなった高橋健治の夫人、ローゼ・レツサさんに關する研究が掲載されていた。ドイツ生まれで、高橋家からは離縁されたながら健治の死後も日本に留まり、鈴木牧之『北越雪譜』の独訳・英訳をしたローゼさんのことに、吉田さんが関心を寄せていることは知っていたが、実際にコツコツと調べておられたことに感銘を受け、かつ日本山岳会々員の間から研究者が出たことを嬉しく思った。

そもそも私がローゼさんのことを知ったのは、小谷温泉山田旅館が刊行した『小谷温泉賛歌』に収録されたローゼさんの文章「慈愛」(坪井靖子訳)によってである。宿の先代山田寛さんは白馬山麓のスキーの開拓者として知られている。高橋健治もスキーの名手だったし、京大が笹ヶ峰に小屋を建てるときには一番熱心に貢献したのが健治だった。北海道旅行で知り合ったローゼさんと1933(昭和4)年に結婚してから、高橋夫妻はしばしば小谷温泉を訪れている。宿では特別なお客に提供する角の一番の部屋を用意して欲待した。ローゼさんにとって幸せいっぱいの日々だったに違いない。

戦争が終って登山活動が再開しても、結核に冒された健治が再び山へ行くことはなかった。ローゼさんとも引き裂かれ、失意のうちに1947(昭和22)年に死んだ健治(享年44歳)のことを思うと胸が痛くなる。



後列左から山田寛・ローゼ・エリザベス 昭和30年頃か
『小谷温泉賛歌』より転載

さんの遺体と最初で最後の対面をしたことになる。ローゼさんからドイツ語を習ったというお弟子さんたち、モアジョイの方たちともその時知りあった。その一人、ローゼさんと親しかった坪井さん(注・前述の「慈愛」の翻訳者)には緑爽会報への寄稿もお願いしてある。

というのは、『岳人事典』などを見ても、戦後ヒマラヤや南極で大活躍をされ、どちらもJ.A.C.会長を務められた今西・西堀のお二人については記述が多いが、早世した高橋健治については戦前のヨーロッパ留学、マッターホルン・モンテローザ登攀、剣岳(チンネ)、北岳(バットレス)登攀の記述があるのみ。京大三羽鳥もいつのまにか、高橋健治から桑原武夫に代ってしまっただけということも聞く。

折も折、伊那の岳人、松尾修さんが『竹澤長衛物語』(山と溪谷社)を刊行。その中に高橋健治の北岳バットレス(昭和2年、dガリ、第五尾根)や京大の樺太探検(昭和7年)のことが出てくる。どちらも長衛が同行しているからだ。松尾さんが高橋健治に好意をもっているらしいので、私から参考資料として吉田理一さんの研究やローゼさんの「慈愛」のコピーを送付した。すぐに「ローゼ夫人とは留学先で知り合ったと思っていた。また高橋家から追われたのは森岡外と重ね合わせていた」と返事があった。また、チゴリザ遠征で京大と親しい芳賀孝

郎元副会長からは、京都大学学士山岳会(A.A.C.K.)のニュースレターNO61が吉田さんの元に届けられた。斎藤清明氏の「高橋健治・ローゼ夫妻と娘エリザベスさんのこと」が載っていた。アメリカで暮らすエリザベスさんとは、私もローゼさんの散骨の際に会っている。これも宿を離れられない美國さんの代わりに彼女の合羽を着せられて代役を務めたのだった。あれからもう10年が経過した。

死後、10年が過ぎてもローゼさんの薫陶を受けたモアジョイの人たちは、彼女を慕って小谷温泉に集まっている。

やがて頼んでおいた、坪井靖子さんからの原稿も届くことだろう。山に登らなくなった私だが、最近登山でなく登山史の周辺を散策している。これもまた、楽しいものである。

(文中に出てくる本や会報は図書館にあります)

◆緑爽会3月ハイキング◆

上野原の里山・五感の森を歩く
期日 3月6日(水) 日帰り(雨天中止)
集合 JR中央本線 上野原駅北口改札
10時35分

(8時57分東京駅発 9時12分新宿、10時16分高尾の快速大月行が便利です)

集合後10時39分発の新井行バスに乗り終点で下車し歩き始めます。

コース 新井―山風呂―能岳―八重山―展望台―大越路(上野原中学校前)―秋葉山―根本山―新町―上野原駅

歩行時間 3時間半 地図 上野原(2万5千)係 近藤雅幸 ☎080・6629・4630

★

編集後記 1月24日に予定していた芦安での新年会は、大雪警報のため宿の方から延期を勧められ、4月に実施することにしました。甲州は桃と桜の美しい季節です。ご期待ください。幹事さん引き続きどうぞよろしく。K